

## 新たな文化・芸術振興の指針の必要性

### 1 文化を取り巻く環境の変化

#### 価値観の多様化と変革の時代

戦後のめざましい高度経済成長により世界の経済大国となった我が国は、極めて高い所得水準を実現した。物質的な豊かさが達成され、価値観の多様化が進む中、人々が精神的な安らぎや潤いのある生活など心の豊かさを重視する傾向は年々強まり、一人ひとりが多様な価値観に基づき、自己実現を図るライフスタイルは定着しつつある。

一方で、高度経済成長を支えた経済効率最優先の日本型社会経済システムにより、現代社会には、環境問題をはじめとする様々なひずみをもたらされ、構造改革や行財政改革など大きな変革を迫られている。こうした中、人々の間には将来に対する不安が募り、社会全体の活力の低下が懸念されている。

このような時代において、文化は、人々に楽しさや感動、精神的な安らぎや生きる喜びをもたらし、人生を豊かにするものであると同時に、多様な価値観が共存する成熟社会にあっては、共感する心、他者への寛容さを育むものとしてより一層重要となっている。

また、「先行き不透明な時代」と言われる近年においては、文化は、未知の課題解決のための創造力・想像力を育むとともに、社会に活力をもたらすものとしてその役割が期待されているところである。

#### 高度情報社会の到来

インターネットやブロードバンドの普及に象徴されるIT（情報通信技術）の急速な進歩により、情報の地域間格差は解消され、地方においても多種多様な情報の受発信が可能となった。また、デジタル技術の飛躍的向上は、CG（コンピュータグラフィックス）をはじめ新しい表現手段を創出し、創造活動の範囲は大きく拡充されている。

しかしながら、こうした電脳空間へ過度に没入すると、人間関係は希薄になり、特に若い世代において、実体験の不足や現実社会への適応能力不足をもたらす一因となるなど、情報化の負の側面も指摘されている。

このような高度情報社会にあっては、文化の役割が、情報の効果的な発信や、新しい技術の有効活用を促す創造力を養うとともに、他人を思いやる心を育むという面で、大きく見直されている。

## グローバル化の進展

今日、経済活動をはじめ、様々な分野においてグローバル化は進み、人・物・情報の交流は地球規模で日常的に行われるところとなり、他の国、民族の人々とふれあう機会は飛躍的に拡大した。

他方、グローバル化の進展による国際競争の激化に伴い、各分野で導入されているグローバルスタンダードは、公平性を担保する一方で、社会を同質化させる危険性をもはらんでいる。

こうした中、文化・芸術による国際交流は、異なる歴史的背景や価値観を持つ国、民族との相互理解を深め、多様な文化の共存による世界平和の礎を築くものとして、その積極的な推進が望まれるところである。

## 地方分権の時代

地方分権推進一括法の成立を契機として、市町村合併をはじめ地方分権の動きは急速に進み、地域の自立とアイデンティティの確立が求められている。

一方で、価値観の多様化、少子高齢化、都市化・過疎化の進展など社会の急激な変化は、地域コミュニティの質的変容を促し、地域の連帯感は希薄化しつつある。

このような変化の中で、地域固有の歴史と風土に育まれてきた文化や、住民参加の文化・芸術活動は、郷土への誇りと愛着を深め、地域住民共通のよりどころとして、個性あふれる豊かな地域づくりに大きな役割を担っている。

## 文化の意義、役割の再評価

「物の豊かさから心の豊かさへ」という志向の変化を背景として、これまで文化の意義、役割については、心に安らぎや潤いをもたらす、あるいは文化を通じて自己実現を図るなど、主として個人の生活の質の向上という観点から語られてきた。

しかしながら、人と人との共感の涵養、人間の創造力・想像力の育成など、文化が本来的に持つ意義、役割は、活力ある社会の実現、経済の活性化、個性豊かな地域づくり、さらには世界平和の実現に至るまで、社会全体に広がりを持っており、その重要性に対する再評価の気運が高まっている。

また、国においては、平成13(2001)年12月に文化芸術振興基本法を制定し、総合的な文化芸術の振興を図ることとなっている。

このような潮流を踏まえ、広島県においても、新しい文化・芸術振興の指針を必要としている。

## 2 広島県文化振興ビジョン（平成4年11月策定）の成果と課題

広島県では、平成4年11月に「広島県文化振興ビジョン」を策定し、「地域に根ざした『文化交流拠点・広島』を目指して」を基本目標として、県民一人ひとりが主体的に文化を享受できる環境づくりや、県民の自主的な文化活動の活性化などに取り組んできた。

この間、県では、県立総合体育館（グリーンアリーナ）、県立美術館がリニューアル整備され、県立歴史民俗資料館、県立歴史博物館とあわせて県民の文化・芸術の鑑賞機会は拡充された。

市町村においても、瀬戸田町民会館〔ベル・カントホール〕（瀬戸田町）、ふくやま芸術文化ホール〔リーデンローズ〕（福山市）、はつかいち文化ホール〔さくらぴあ〕（廿日市市）、しまなみ交流館〔テアトロシェルネ〕（尾道市）をはじめとする文化会館や、広島市現代美術館（広島市）、三良坂平和美術館（三良坂町）、蘭島閣美術館（下蒲刈町）、平山郁夫美術館（瀬戸田町）、ふくやま文学館（福山市）、呉市海事博物館（仮称）（呉市）など地域に根ざした個性あふれる文化施設の整備が進み、地域住民の文化・芸術活動の場、文化・芸術の鑑賞機会が充実されるとともに、地域文化の積極的な発信が行われている。

平成6（1994）年には、アジア各国を代表するアスリートがその技と力を競い合う第12回アジア競技大会広島が開催され、大会期間中に行われた選手、関係者と県民との多彩な交流は、草の根の国際化を大きく進展させる契機となった。

また、平成9（1997）年には、開発途上国の人材養成の支援を目的としたひろしま国際プラザが整備され、県民と世界各国の人々との交流の場が拡充されている。

さらに、有形・無形の文化財等の指定（国指定260件、県指定627件：平成14年2月14日現在）や、草戸千軒町遺跡、冠遺跡群など埋蔵文化財の発掘調査が着実に進められるとともに、県立歴史博物館等において、その公開と活用が積極的に行われている。また、平成8（1996）年には、厳島神社、原爆ドームが世界遺産に登録されている。

このように文化遺産の継承と活用を推進する一方、県立自然公園や中央森林公園の整備などによる豊かな自然景観の形成、竹原や鞆をはじめとする歴史的街並みや歴史的景観の保全により、広島らしい景観づくりにも寄与してきた。

このほか、朝鮮通信使の再現（下蒲刈町）、そばの里づくり（豊平町）、灰塚アースワークプロジェクト（総領町、三良坂町、吉舎町）など県内各市町村においては、地域固有の歴史や文化を生かした個性豊かなまちづくりが行われるようになっている。

また、酒づくりの命とも言える水を守るための上流の森林保全活動（東広島市）や、義務教育への邦楽の導入に伴い行われた調弦、糸替のしやすい「新福山琴」の開発（福山市）などは、従来の文化の枠を超え、環境保全、産業振興へも広がりを見せる新しい動きとして注目される。

全国的なイベントとしては、平成11（1999）年に「第11回全国生涯学習フェスティバル in 広島（まなびピア広島 99）」、平成12（2000）年に「第15回国民文化祭・ひろしま2000」、平成13（2001）年に「第14回全国健康福祉祭（2001ねんりんピック広島）」、平成14（2002）年には「第15回全国スポーツ・レクリエーション祭（スポレク広島2002）」が開催され、全国の老若男女が県内各地を訪れ、文化・芸術、スポーツを通じた交流を楽しんだ。

特に、「第15回国民文化祭・ひろしま2000」は、市町村、関係団体、ボランティア等の協力を得て、全県的に開催され、ひろしまの多彩な文化・芸術を全国に向けて発信した。この開催に向け、文化・芸術の各分野において、すそ野の拡大、レベルアップが精力的に図られ、広島県の文化・芸術活動の活性化に大きな効果をもたらした。

このように様々な成果が上がる一方で、各地の文化施設が地域の文化・芸術の発信、交流拠点として有効に活用されていないこと、高度化、多様化が進む県民の文化ニーズや、国際化、情報化の進展など時代の変化への対応が不十分であることなど、解決すべき課題がある。

これまで述べてきた広島県文化振興ビジョンの成果を継承し、より一層発展させるとともに、新たな課題の解決方策をも見据えた、名実ともに21世紀にふさわしい文化・芸術振興に関する新たな指針の策定が必要となっている。